SPECIAL MESSAGE

神戸百店会だより

NEWS

●山中木地漆器展～ろくろ職人〝200の手〟～開かれる

5／6(月)～5／11(土)丸善神戸元町店1階特設会場で山中木地漆器展が開かれた。

この催しは、～ろくろ職人〝200の手〟～と題し、山中漆器連合協同組合の後援を得て行なわれたもの。展示即売された漆器作からは産地に在住する約130名の木地職人が、400年の歴史を経て創り上げた産地独自の挽物技術がうかがわれる。

日常生活に気軽に楽しめる漆器展、生花・お茶ブームにうまく波に乗ったようだ

山中木地漆器

BRIDAL

●大丸前つるや衣裳店が、花嫁衣裳大展示会を

昨年12月にポートアイランド国際展示場で開かれ、好評を得た大展示会が今年も6月に開催される。

6月16日(日)、午前10時～午後6時迄、場所は同じくポートアイランド国際展示場2Fホール。

慶びの日の〝愛の装い〟を夢みるあなたには、ぜひごらんになっていただきたいジュンブライダルショーです。案内状をご希望の方は、つるや衣裳店までお申し出下さい。

●つるや衣裳店／神戸市中央区三宮町1－9 ☎078(321)0360㈹

昨年の展示会から

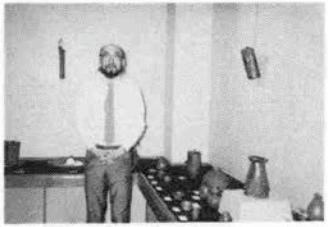
GALLERY

●備前焼作家和仁正興(わにまさおき)氏がギャラリーはりしんで作陶展を開催

岡山在住の備前焼作家和仁正興氏が、神戸では2回目の作陶展をギャラリーはりしんで4／25～4／30日まで開催した。

和仁氏は、昭和42年に当時備前焼の大家であった金重陶陽師の門下生としてスタート。昭和50年には郷里にもどって初窯を出す。後は、昭和51年の第1回個展をはじめとして、地元岡山で個展を続けている。

「焼き物をやるとは思っていなかった。焼き物は一生かかっても自分では納得しにくいもの。現在の作品もまだ気に入らない所があるんです」と和仁氏は謙虚。約30点の作品には穏やかだが内容充実した彼の生き様がうかがえる。



作品の前で和仁氏

ORIGINAL

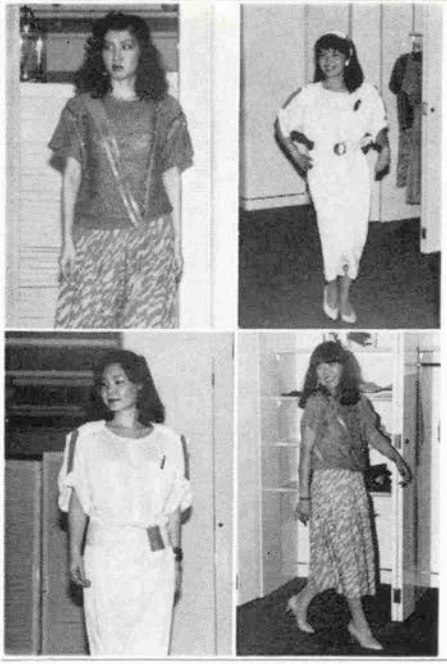
●ファミリア北野坂ハウスオリジナルコレクション

4月27日～5月12日までファミリア北野坂ハウスリトルギャラリー新館2Fで「オリジナルコレクション」が開かれた。

テーマは、〝北野坂ハウス〟そのもの。ファミリアの商標になる「アメリカンはなみずき」「小鳥」などをモチーフにしたキッチン田品・リビング用品・アクセサリーがギャラリーいっぱいに展示されていた。

キッチン・リビング用品などは、ひとつの物語としてディスプレイされ、最初の語りは「港町神戸にある小さな白い洋館です…」とつづく。小さな洋館でのオリジナルコレクションが、神戸を夢のある街に演出している。

〝北野坂ハウス〟をテーマにしたクラフトアクセサリー（左）とキッチン・リビング用品（右）



SHOW

●夏のサヴィは
大人の遊び心をくすぐる

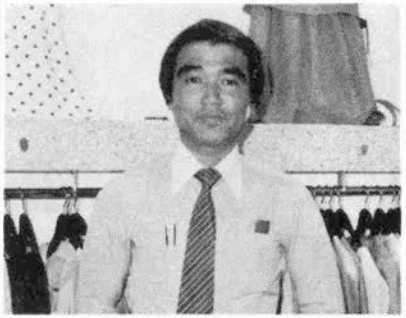
センタープラザ3階にある＜リザ・サロン＞神戸本店で、4月19〜21日、'85夏のサヴィニットコレクションがお客様をモデルに開かれた。

今年のサヴィは、肩に丸みのあるパットを入れたものやドルマンスリーブが多く、トップにボリュームをもたせ、ボトムをタイトにおさえている。サヴィニットは追求されたシルエットと着心地にこだわり、トータルのバランスに執着した完成された大人の女性のための服。

さりげない気こなしで、クラシック・エレガンスに挑戦してみませんか。

●＜リザ・サロン＞神戸本店 ☎391−6806

PEOPLE〈33〉



●女性にはエレガントな美しさを…
二重　進＜セリザワさんちか店店長＞

リボーンリフレッシュオープンしたセリザワさんちか店店長の二重さんは、今年で勤続20年。営業販売に携わりながら、大丸前紳士物に5年間勤務し、昭和46年からはさんちか店店長となる。「今までのタウンの中からメインの通路にうつったので、若い女性が大変多くなりました。これからは新規の顧客管理に努めるつもりです」と嬉しい悲鳴。

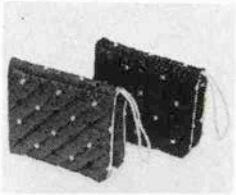
TOPICS

●神戸オリエンタルホテルからサマーウェディングのご案内！

期間／7月1日〜8月31日
料金／50名様60万円、追加1名様につき12000円、特典／挙式料50％割引き。音楽演奏、写真、ビデオ撮影、ブーケ15％割引き。貸衣裳、美容着付20％割引き。引出物5％割引き。お2人のご宿泊（朝食付）プレゼント。
・サマーウェディングパック以外の通常セットの挙式及びご披露宴も承ります。（右記期間中の場合に限り特典をご利用いただけます）
詳しくは宴会予約係へ☎（078）331−8111

●ブライダルチャペルのあるポートピア神戸風月堂が、60年9月15日オープン予定。夢の島ポートアイランドで晴れやかにウェディングベルを…御結婚式披露宴、各種宴会ご予約承ります。お料理、ご予算、各種演出などお気軽にお問い合わせ下さい。神戸風月堂／（078）−321−555

●レストラン・ブラン・ドゥ・ブランのもう一つの顔「日本の味−天ぷらコーナー」は、ご招待・ご商談にぜひお推めしたいお食事コーナーです。ランチタイムには、ビジネスマンやOLにもお気軽に利用していただけます。（サービスタイムA：M11：00〜PM2：00）ご予約は☎（078）321−1455まで。



●ブティックサンミヨシヤよりポシュットを

ブティックサン・ミヨシヤより、折りたたみ式の、便利なポシェットを3名様にプレゼントいたします。カラーは黒・赤・黄の3色。カバンの中にも入り、手に持ってもお洒落なアクセサリーポシェットです。受け取りはブティックサン・ミヨシヤまで。

●ゴンチャロフ製菓より夏の新製品「クールメッセージ」を

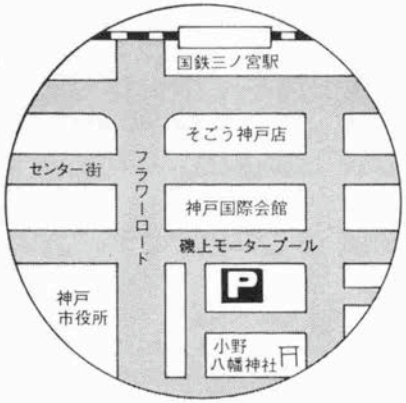
ゴンチャロフ製菓より、香りの飲みものデザート「クールメッセージ」（¥2,000）を5名様にプレゼントいたします。ワイン・グリーンティー・ティー・コーヒー、それぞれの豊かなアロマを生かした繊細な風味をご満喫下さい。

PRESENT CORNER

♥

応募方法●葉書に住所、氏名、電話番号、希望する商品名を明記の上、神戸市中央区東町113−1大神ビル9F「月刊神戸っ子」神戸百店会プレゼント係までご応募下さい。6月20日消印まで有効です。当選者には神戸っ子から当選葉書を発送、葉書を持ってお店まで、プレゼントを受け取りにお出かけ下さい。

ビジネスに!
ショッピングに!
ご利用ください



磯上モータープール

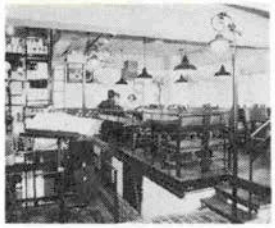
●収容台数 350台
●月極駐車可
●年中無休

(神戸国際会館前) TEL (078) 251-2662 (8:00A.M.~11:00P.M.)

びっと・いん

★陽気なことが大好き
チャールストンカフェ

「何かおもしろい企画がないかな」といつも思案のマスターは、陽気な店づくりにご執心、浮かんだアイデアの一つに火、木曜8時にセットの〝乾杯ビール〟。嬉しいこと悲しいこと、ばかばかしいことみんなまとめて〝乾杯〟。他にも多彩な企画を毎日盛り込む趣旨だからぜひ参加したいところ。場所はトアロードと交差するサンセット通りをすぐ東へ。タイシンサンセットビル2Fにあるアメリカンスタイルの店。カラオケステージあり、パーティもOK。

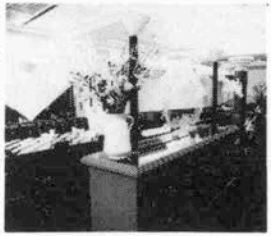


ヤングの溜り場

■神戸市中央区北長狭通2—5—1 タイシンサンセットビル2F 3PM～2・30AM無休
☎078（321）5502

★ファッショナブルで
アンニュイな〝サラ・ボーン〟

東門筋の北入口から少し南に下ると東側に、トルコブルーの小さな扉。押すと港の波止場のような、白く塗られた鉄のロープ状をつたって階段をのぼる。導入部がムーディだ。〝サラ・ボーン〟は、トルコブルーの色が印象的なファッショナブルでナウいインテリア。女の子たちも、ちょっとアンニュイなファッションでおしゃれな感じ。ママさんも神戸らしいモダーンだけど気さくな雰囲気で、こまやかな気づかいだ。



ゆったりした時間が広がる

改装したばかりだが、フレッシュさが受けて、活気のある賑わい。神戸のナイトライフの魅力を楽しませてくれる。

■神戸市中央区中山手通1—17—10 小坂ビル2F
☎078（321）5504

★玉子の香りがプーンと
手焼せんべいの魅力

手づくりせんべいを焼く四角い鉄板の上に、黄金色のねった粉が、少しづつ四ツ。ぐっと鉄のふたを押えて開けるところに焼ごてで楠正成がジュッーと。ぽんと鉄板から落された焼きたての瓦せんべいをつまんで見る、さっくりして玉子がふんわり香る。美味しい！

阪急春日野道駅の山側にある春日野道商店街のすぐ西側の〝東京堂総本舗〟は前川さんの親子が焼いて、奥さんが販売員。200円の野球カステラ、瓦せんべい250円（一〇〇〇円、一五〇〇円）格子せんべい、豆せんべいなど、焼きたてがいかにおいしいかと素朴に考えてしまう味。今評判の手焼せんべいの店。

■神戸市中央区国香通1—1—19
☎078（222）8838

家族三人で頑張ってます

●神戸うまいもんとドリンキング

寿司と懐石料理
花隈・成駒家

中央区中町通2—3—1チサンホテル1F
TEL（371）—3150

花隈・成駒家が新しくチサンホテルにもオープンした。「気軽で親しみを持ってもらえるお店を」そして「グルメの女性にうなづいてもらいたい」と云うのがこの店。

落ち着いた造りの店内

メニューの方も、〝扇〟¥3000（ミニ懐石・7品）〝松花堂〟¥2000の他、〝成駒弁当〟¥800など、ちょっと味香を選りすぐった昼膳を用意する処は流石。勿論、寿司の方も定評通り。手巻きネギトロあたりにもこのお店の意気込みと練られた伝統の味が生きている。40人程の宴会も可能、ホテルへの出張仕出しもするそうで、逗留する旅行者からも〝海の幸に恵まれた神戸〟の贅沢な土産話として重宝されそうだ。

ポケット ジャーナル

★〝ザ・ウィンドウ・オブ・コウベ〟地下鉄の映像（ユメ）（ケイ）

「壁新聞登場」！

大倉山駅から三宮駅まで、待望の地下鉄が六月十八日に開通するが、同時に新しいマルチ・ビジョンが登場する。「ニューメディア・オブ・ウィンドウ」がそれで、タテに4台、ヨコに8列、計32台のブラウン管を連ねた大規模なものの既にこのようなニューメディア仕様のディスプレイは、「さんちか」などでも親しまれているが、これは、テレビ・ビデオなどのアナログ映像とビデオテックスなどのデジタル画像を同時に自由に使いこなせる新設計で世界初のものだ。

完成予想図

この第1号機は、地下鉄・新三宮駅中央コンコースの壁面にお目見得するが、ひきつづき京阪神各地をはじめ、全国の主要ターミナルをネット化していくということで、この〝TV壁新聞〟、街の話題をさらいそうだ。

★本音とタテマエがぶつかるクロスカルチュラル

国際化時代が進み、異文化をもった人々との交流が増えている今日、互いの社会、習慣を理解することが大きなポイントとなる。

盛り上がった前回のディスカッション

特に日本人でわかりにくいとされる〝本音とタテマエ〟が、日本独特のものであるのかどうか。今村朝日放送国際室長をコーディネーターに、5カ国のパネリストのディスカッション、「すれ違いのコミュニケーション」が6月9日午後1時半より神戸国際会議場で開かれる。各国の文化の一端がうかがえそうである。

■申込先　〒650 神戸市中央区加納町2―7―15　神戸YMCAクロスカルチュラルセンター☎241 8801 参加費1200円　まずTEL予約を

★文化理解による国際交流をめざして

発展途上国の物産などを展示、貿易取引の拡大、国際交流の推進などの活動を続けている神戸国際交流協会。ユニバーシアードフェスティバルで5月24日から7月21日まで〝ウガンダ展〟が開催されるのを機に、6月23日1時半より国際会議場メインホールで、国際文化講演会を開く。

テーマは――いま、アフリカを考える――で、国立民族学博物館助教授の端信行氏が文半の歴史について。和田正平氏が今日的問題について語る。

端　信行氏　和田正平氏

■希望者は、往復葉書に住所・氏名・年齢・職業を明記　〒565 吹田市千里万博公園1の1（財）千里文化財団国際文化講演会係へ

★ボーイスカウト兵庫連盟35周年1万人大集会

日本ボーイスカウト・兵庫連盟がこの程35周年を迎え、記念事業として、4月29日、ポートアイランドのワールド記念ホールをメイン会場に、1万人の大集会を行なった。

この兵庫連盟は昭和25年

誕生日ありがとう運動

★ちえおくれの人の就労問題の映画撮影開始

ちえおくれの問題の啓発映画を作って寄贈するから、活用してほしいという大変ありがたいお申出がありました。この申し出は、本運動の啓発映画「小さな輪・大きな輪」の撮影ボランティアの松本一郎さんです。

松本さんは、「誕生日ありがとう運動のしおり増刊第八十号」の第二～三面に特集した、ホテイ護謨株式会社で働くちえおくれの人たちの様子に感激されました。そこで自分の得意とされる八ミリ映画によって、ちえおくれの人の就労問題をまとめてみようとお考えになったのです。

本運動でも、啓発映画「小さな輪・大きな輪」は、昭和五十七年三月以来全国各地で上映され、五本の貸出しフィルムが、フル転という状態で、そのアンケートでも、次の啓発映画を望む声がでています。だから、この映画の寄贈をうければ、きっと多くの方に利用いただけることでしょう。

松本さんの構想では、ホテイ護謨式会社で働く特定の一人を中心にして、職場と家庭に焦点をあてて撮影されるようです。

ホテイ護謨株式会社も全面的に協力され、撮影の中心人物も決定し、諸準備は順調に進んで、撮影を開始されました。

みなさんと共に、このちえおくれの人の働く様子を中心にした映画の完成を待ち望んでいます。

●誕生日ありがとう運動本部　651 神戸市中央区御幸通八―一―六　神戸国際会館一階の郵便局の隣　☎二五一―八一六一内線三一六

に産ぶ声をあげて以来、戦後の復興、成長、成熟の時代の流れに沿って、子供たちと共に発展して来た。近年、スカウト人口の要であるCUBサークルの減少という悩みをも抱えてはいるものの、午前中の第1部、午後のアトラクション共に多くの観衆の参加も得て成功裏に会を閉じ、ボランティアの育成と運動の前進へ次なる一歩を期していた。

会場のワールド記念ホール

★ニューヨーク・ニューヨーク！

昨年五月の連休に初めて神戸・三宮そごう美術画廊で個展を開き評判を呼んだニューヨーク在中のイラストレーター永沢まことさん（49）が、今年は〝'85年の北斎ニューヨークを描く・NEW YORK 三十六景展〟と意欲的な作品で五月二日から神戸っ子達にアピール。

永沢まこと夫妻

ニューヨークの風景と人間がイキイキと詩情漂わせて描かれ、まるでマンハッタンの中にいるような息づかいと安らぎがあるのは愛着こめてスケッチする〝MAKO〟の姿を見るようだ。

今年は「ニューヨーク人間図鑑」や「ニューヨークエスニック図鑑」などの筆者で、夫人の宮本美智子さんも姿を見せて「十七年もいてアキアキするほど……（笑）」といえるほどのニューヨーク通。「ニューヨークの作家達」や「ニューヨークの女たち」など、彼女の仕事もニューヨーカー達の魅力を引き出す〝人間讃歌〟は夫妻の共通点。見事な国際人だ。

★ライオンズクラブが「東西狂言会」

神戸湊川神社にある神能殿で、去る4月16日、「東西狂言会」が行なわれた。これは、神戸生田と神戸楠の両ライオンズクラブの主催によるもので、今回で7回目になる。

観客を湧かせる「墨塗」

周知のように〝狂言〟は600年もの永い間に亘って、中世の風俗や話し言葉を伝えて来た文芸資料であるが、青少年の人達にも、この〝笑いの芸術〟に親しんでもらおうというのがこの催し。当日の会場はほぼ満席で、外国人の姿もちらほら。夜の部では、人間国宝・茂山千作さんの小舞をはじめ、コミカルな「墨塗」など4つの演目で場内を湧かせていた。

★灘校文化祭につくば博

中2グループの名企画

人間・居住・環境と科学技術をテーマに、筑波で科学万博が開かれているが、5月2、3日に行なわれた灘校の文化祭で万博の衛星放送を受信、放映するPR展が行なわれた。

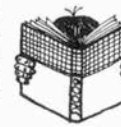
若い"企画集団"

中学2年の小吹文紀君を中心とする12人のメンバーが、1月より企画、実施に向け活動を始め、つくば万博をより身近に感じられる内容にするため、約四十の企業、団体をまわり、文化祭当日には、各パビリオンのポスター、スタンプ、宣伝用ビデオなど充実した資料を存分に使った展示会場をつくりあげた。

★うるわしの三美神誕生へ

交通センタービルの角に

図書ガイド



境一郎先生の「酒と人と学問」
境一郎先生を かこむ会編

神戸商大で、その前身である神戸経専時代から数えて40年の永きに亘って教鞭をとった境一郎教授の定年退官に際して発行されたエッセイ集。既に各界で活躍しているゼミ卒業生らが、当時の想い出を様々に寄稿している。＜この書籍についての問い合わせ先は、☎0078（974）3609〝かこむ会〟まで＞

「はな唄と交響曲と」
中村茂隆著

タイトルにもよく表現されているように、日常の小さな契機を起点に、〝音楽よもやま話〟が手際よくまとめられて、楽しい読み物となっている。筆者は神戸大学で音楽理論を教授される方だが、「海外からやってくる〝名〟演奏家の会を最大の関心事とし」ているクラシック関係者の「ひとりよがりな差別意識」をやんわり諭してみせる文章は、人柄だけでなく、信条にも裏打ちされている。＜神戸新聞出版センター ¥1200＞

二分間の冒険
岡田 淳著
太田 大八（絵）

「時計ではかれない時間」をご存知でしょうか。腕時計と睨めっこしながら先を急ぐ日常のなかで、つい忘れがちなもの。この物語は、ダレカと名のる黒猫を狂言廻しに、「この＜ひたり縮んだりする＞もうひとつの時間」を思い出させてくれる冒険の旅に連れ出します。岡田さんの第3作にあたり、今日的問題にもさらりと触れられていて、大人も楽しませるファンタジーです。＜偕成社 ¥950＞

地下から姿を現わした〝さんちかの女神アルバ〟の側で腰掛けて街を眺める人々が多くなった。中央区役所の東南角の二美神に続いて、この七月には、ポートアイランドファッションタウンの子供服メーカー〝キムラタン〟（中央区港島中町6丁目）の一階フロントに〝三美神〟が誕生する。

〝三美神〟

作者は彫刻家の新谷琇紀さん。只今、その三美神のうるわしくも力強い女神の制作に全力をあげている。

キムラタンの木村豊社長は、この春急逝され、五月十六日が社葬。〝三美神〟は、ファッションに生命をかけた豊社長の〝美〟へのシンボルに思えて、その誕生が待たれている。

★ラジオ関西が ギャラクシー選奨を受賞

ラジオ関西制作の「スタジオTODAYホットに語ろう！」（月～金AM10・04～11・05）が、59年度のギャラクシー選奨を受賞した。

これは、放送評論家を中心にした「放送批評懇談会」の主宰によるもの。1年間に放送されたラジオ・テレビの全番組のなかから優秀と評価されたものに贈られる。

今回対象となったのは、「核の時代に人間は…」（59年11月9日放送）で広瀬隆氏をゲストに、核実験の後遺症、原発の廃棄物処理などの難解で敬遠されがちな問題を「平易にして身近なトーク番組とすることに成功」したと評価を得た。

「スタジオTODAY」収録風景

受賞式は5月29日に東京で行なわれる。

花時計

須磨こそ大切に

須磨の水族館が構成を新しくして観やすくなったという新聞記事の記憶が頭に浮かんだ。

そして、水族館を訪ねた。大型連休も最後の一日とあって、親子連れで賑わい混み合っていた。

確かに水族館の展示も面白く組み立て直されて久しぶりに多種多様の魚たちとめぐり合った。

今年は源平八百年祭として観光キャンペーンが行われているが、魚にも「アツモリウオ」と「クマガイウオ」がいて、小さな魚ながら、いかにも手のこんだ武張った姿形をしているのに思わず微苦笑というところだ。

それにしても、須磨の海岸線の変わりようには、呆然、驚くばかりだ。

いつの間にか砂浜へアスファルトの道が二本も出来て砂浜が異様に広がり、アンバランスな風景になっていた。

名だたる日本第一の風光と歴史をもつ須磨界隈をどのように育て守るべきなのか大きな課題である。北野町、三宮界隈はいま、若い観光客で賑わってはいるが、観光という視点からだけ見てもこの須磨界隈のグランドデザインを、今しっかりと見直し、神戸の観光のもう一つの拠点として生かすべきではないか

〈Y〉

KOBE POST

★兵庫県フラワーセンター協会（財団法人）も10周年を迎え、淡路ファームパークも開園して新体制で管理運営されます。会長・**坂井時忠**／理事長・**大谷薫**／専務理事・**田路一夫**／フラワーセンター園長・**松本廣美**／淡路ファームパーク園長・**永田福夫**。

★兵庫県教育委員会社会教育・文化財課長の**西澤良之**氏が、四月に文部省大臣官房政策課勤務に転任され、後任に**北村幸久**氏が着任されました。

★関西地域開発株式会社より、株式会社大阪マルビルと社名変更のお知らせ。ファッションタワー大阪マルビル・大阪第一ホテル／株式会社大阪マルビル（取締役会長／**藤田一暁**、取締役社長／**吉本晴彦**）

★四月より市民局長の**伊藤治行**氏が中央区長に転任、後任に**田淵栄次**氏が市民局長に就任されました

★ファッション関係におなじみだった神戸市経沢局商工課商工係長の**松井泰男**さんが、市民局消費生活課消費生活係長に。後任には**矢倉康雄**さんが着任されました。

★演出家の**岡田美代**さんの新事務所（自宅）のお知らせ。〒神戸市兵庫区湊川町6丁目3ノ24エクセル湊川701号 ☎078（511）6739

★神戸市出身の女優**明日香尚**さんが〝どりみい7〟（代表**高橋泰**）に所属。〒107東京都港区赤坂2ノ21ノ21 ☎03（585）5844

★大丸前のブティック〝セリザワ〟のセリザワインターナショナル**芹澤豊男**さんのお嬢さん**涛方子**さんが、5月25日に**阿部泰久**さんとポートピアホテルで結婚されます。おめでとうございます。

★明石の歯科医**柏木善平**氏の長女**由紀子**さんが、4月20日プラザホテルで、大阪電通マンの**三木知敬**さん（**三木健次**三共生興KK副社長ご子息）と挙式。新住所は豊屋市朝日ケ丘町507ノ1、朝日丘アーバンライフ弐番館305号

★リボーンさんちかで、はなやかに改装した**鍬ムラタ**（**久木克悦**社長）のお嬢さん（**久木ちひろ**さん）が、東京吉祥寺のカトリック教会で、4月28日に**澤畑敦**さんとゴールイン。おめでとう！

□第十回

神戸文学賞
神戸女流文学賞作品募集

小誌は昭和51年に創刊15周年記念として神戸文学賞および神戸女流文学賞を創設いたしました。これを機に有為の新人に新しく道を開くとともに、西日本における文学活動の一層の発展のために微力を尽したいと願っております。過去の受賞作品は次の通りです。

◦第一回神戸文学賞「島之内ブルース」（田靡新＝尼崎市）同女流文学賞「ペットの背景」（小倉弘子＝大阪市）
◦第二回神戸文学賞「姥捨て」（奥野忠昭＝大阪府柏原市）「生活」（吉峰正人＝神戸市）
（この回の神戸女流文学賞は該当なしで、神戸文学賞を二作が受賞）
◦第三回神戸文学賞「自由と正義の水たまり」（蒼竜一＝奈良市）同女流文学賞「夢の消滅」（大原由記子＝高知市）
◦第四回神戸文学賞「溶ける闇」（高木敏克＝神戸市）同女流文学賞「影と棲む」（田口佳子＝伊丹市）
◦第五回神戸文学賞＝該当作なし、同女流文学賞「痕跡」（久保田匡子＝大阪市）
◦第六回神戸文学賞「ガャマン」（南禅満作＝神戸市）同女流文学賞該当作なし
◦第七回神戸文学賞「凶鳥の群」（徳留　節＝京都市）同女流文学賞「花いちもんめ」（新　光江＝鳥取市）
◦第八回神戸文学賞「昔の眠」（服部洋介＝神戸市）同女流文学賞「薔薇の聳音」（菊池佐紀＝愛媛県）
◦第九回神戸女流文学賞「ストラルブラグ」（桑井朋子＝高石市）「いちじく」（字山　翠＝北九州市）
（この回の神戸文学賞は該当なしで、神戸女流文学賞を二作が受賞）

ここに第十回文学賞を公募するにあたり、多数の意欲的御投稿をお願いするとともに清新かつ強力な作品の出現を期待する次第です。

〈募集要項〉

一、神戸文学賞は男性作品、神戸女流文学賞は女性作品とし、共に西日本在住者で応募作品は一篇に限ります。
一、応募作品は未発表原稿、または締切以前、一年未満に発行の同人誌に掲載したものに限ります。
一、原稿枚数は四百字詰百枚前後。
一、原稿には住所、本名、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度の作品主題（創作主旨）をつけて下さい。
一、締切りは八月一五日（当日消印有効）
〈選考委員〉足立巻一・小島輝正・森川達也・島　京子
一、入選発表は本誌昭和六十一年新年号誌上で、同号より作品を掲載します。
一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。
一、入選作品の著作権は本誌に属します。
一、入選作品各一篇には副賞として賞金二拾万円が贈られます。
一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市中央区東町一一三の一　大神ビル九階月刊神戸っ子「神戸文学賞係」まで。
電話〇七八―三三一―二二四六

主催／月刊神戸っ子

三平の神戸おもしろ風俗記〈その9〉
●阪神50周年甲子園をいく
ゆらぎ、どよめく「トラキチ」万灯会

★
るぽらいたー
小関三平
〈神戸女学院大学教授〉

若き竹久夢二が、岡山の故郷から初めて神戸に出てきたとき、彼を大いに感激させたのは、「ベース・ボール」だった。それ以後、夢二は野球ファンとなり、上京してから、早慶戦の絵を描いたハガキを、せっせと、近くの小さな土産物店に届けたという。その店を営んでいたのが、のちに、どろどろした愛憎のドラマで彼の人生を彩る、他万喜夫人だった。

いま、狭い意味でのコーベには、かつての滝川中学や神港商業のような、全国銘柄の名門野球チームはない。ただし、「阪神間」もふくめて「神戸」を広く解すると、報徳学園と、阪神タイガースと阪急ブレーブスを、その誇り（？）としてもよいかもしれない。

いよいよセリーグペナントレースもスタート
50周年を記念して新しい応援歌もできました。

もっとも、厳密に言うと、タイガースもブレーブスも本社は大阪にあるのだが、南海ホークスや近鉄バファローズのファンに言わせるに、「あんなもん、西宮の球団じゃ」ということになる。

こうなると、なかなかムズカシイのだが、ま、屁理屈はともかく、コーベのプロ野球ファンの大多数は、「トラキチ」らしいし、私の勤める「神戸」女学院の学生諸嬢においてもしかりだし、タイガースが負けた翌日は、教室に入るときの表情がちがう、なんて噂されるオバさま教授だって、居るほどなのである！

というわけで、今回は、甲子園球場での「阪神―巨人」カード・第一回戦を、取材することとなった。なによりまず、全国に勇名の轟く、熱狂的なタイガース・ファンの応援ぶりを、この眼でたしかめよう――というのが主たる動機で、それには、なんたって、「憎きジャイアンツ」を迎え撃つ、今年度の初戦にかぎる。

まず、時計台下で、「タイガース私設応援団」の伊東進さんと落ち合ったのだが、名刺の肩書きを見て、オドロいた。「総務監事長」とある。さすがに伊東さんは、なかなか親切な人で、「相談役」の一人・森谷義男さんとか「監察」の森谷一夫さんとかに引き合わせてくれたり、球場の担当者に「取材協力」を取りつけ、いろいろ

アドヴァイスしてくれた。

ただし、あらかじめ球団の営業担当に話をつけておいたのに、江夏みたいに腹の出た中間管理職風の男は、こちらが丁寧に頭を下げているのに、「なんや、こいつ」というような眼つきで、ジロリと一瞥しただけで挨拶も返さず、きわめて不愉快であった。私の先輩にあたる球団代表・岡崎義人氏に掛け合おうかと思ったが、あとで紹介された球場次長の印象は悪くなかったので、忘れることにした。取材は、つねに忍耐を要するのだ。

だが、お客の入らないパ・リーグの「シンパ」たる私の、多少はヒガミを伴なう立場から見ると、取材する者への気配りの足りなさは、この球団の一面を表わすようにみえる。黙っててもお客は大入りなのである。

取材班は三人だが、「特別指定席」の招待券は二枚しか、もらえなかった。で、財政が決して豊かとは言えない本誌編集部は、予定外の切符を一枚、買うことになった。「外野指定席」である。外野に指定席があるのも珍しいが、これも、人気があるためだろう。

タイガースファンにはお馴染み、ヒゲの団長松林　豊さん（上左）と相談役森谷義男さん。「私設応援団といってもいろいろ規則がありましてね」と総務監事長の伊東進さん

あえて右翼の外野席券を買ったのは、そこでの応援がいちばん派手だと、聞いたからである。入ってみると、なるほど、聞きしにまさる熱気がムンムンしてる。スコア・ボードを中心に、右翼には、タイガースの帽子をかぶり、黄色いメガフォンを持ったファンがギッシリ、左翼のジャイアンツ・ファンは、オレンジ色のメガフォンを持っている。

試合が始まったとたんに、もう、こちらのアタマはおかしくなった。なにしろ、ギッシリ満員、周囲はすべて熱狂的ファンで、それこそ一投一打ごとに、ワー、ワー叫ぶ。たとえ、ファウルでも、である。

実は、四回表で、すでにジャイアンツは、「2－0」でリードしたのだが、そうなると、積年の怨念が胸中にわだかまるトラキチは、ますます声を張り上げる。すると、念力が通じたのか、新監督に率いられる「だめトラ」は、突然ガバチョと牙をむき、なんと、四回の裏に、三本もホームランを打ち、一挙に七点も入れたのである。

もう、こうなると、右翼席は、まさしく狂喜乱舞、総立ちとなり、リーダーの掛け声に合わせて、浜甲子園沖を航行するタンカーにも聞こえんばかりの、歓声と絶叫に、文字通り、「どよめく」のである。

「銀傘をゆるがす」という表現も、なるほどウソではない。

なにしろ、何千人が一団となって、さまざまなコールを、際限なく繰り返すのだから、冷静に周囲を観察すべき私も、なんとなくコーフンしてくる。それに、ポツンと一人、シラケているのも、なんだか、ワルいような、恥ずかしいようなさびしいような気分になってくるのだ。

単なる「声」援ではない。手拍子を打ち、黄一色のペン・ランプメガフォンを打ち振り、あるいは、お酒を飲んだあとの紙カップをメガフォン代りにしたり、

見て下さいこの頭、ここまで徹底すると見事！（右）一体どうなっているのでしょうか。あまりの凄さに、思わずスコアーボードを確認（中）。〝論より証拠〟この連続写真をご覧下さい（左）。

それを握ったコブシを、掛け声とともに突き出す。エアロビクスなんかしなくても、この全身運動は、健康増進に役立つこと、マチガイない。

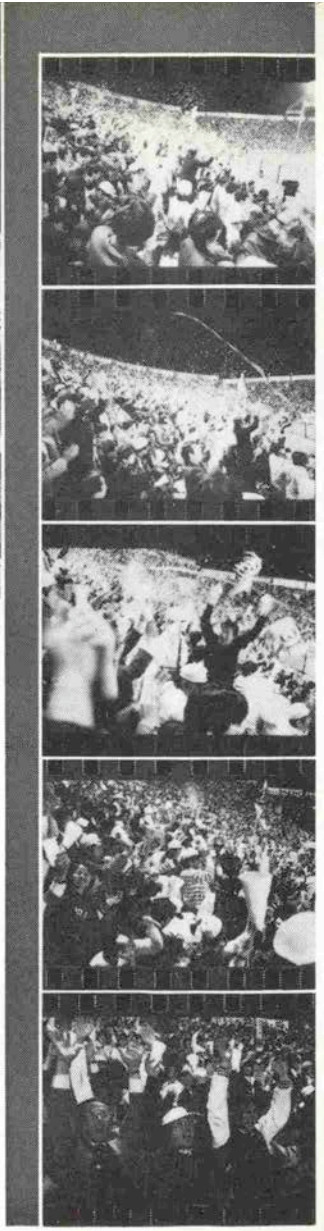
ふと横を見ると、あちこち走りまわって「職務」を遂行していたカメラマン・池田クンも、いつの間にやら席に戻って、立ち上がり、ワーワー叫んでるし、いつもは寡黙で控え目、おっとりした「深窓の令嬢」然たる本欄担当の瀬川サンまで、珍らしくも「ワンカップ」で火照った頬を、コーフンでさらに紅潮させ、これまた立ち上がって、「ガンバレ、ガンバレ、マ・ユ・ミ、オー!!」などと、かぼそい声を精一杯張り上げて、笑顔満面、なかば恍惚の人となっている……。

私は、内心ビックリし、かつはアキれ、次いで、ニヤニヤしてしまった。「野球場は初体験」と言ってた瀬川嬢が、「実はトラキチ、真弓ファン」だったのだ。甲子園球場は、人格を一変させるのである！

閑古鳥の鳴くパ・リーグでは、こうは行かない。こんなお祭り騒ぎになることは、まず、ない。ところが、甲子園球場では、これが常態なのだという。当夜は、まだかなり寒くて、外野席の最上層に上がって、いや、登ってみると、浜風はビュービュー吹いたいた。だが、ここでも、竹の子族ルックみたいな、奇妙な寛衣を身にまとった、高校生が三人、大きな旗を持って走りまわりながら、応援を、自発的に（？）リードしていた。東洋大付属・仰星高（枚方市）のクラス・メイトだと言う。

左翼席に行ってみると、こちらは、空席も多く、すっかり意気消沈していたが、その代り、アヴェックがひっ

タイガース応援のためにというこのいでたち
（右）戦いすんで日が暮れて、バンザーイ
（左）タイガースが勝てばお客さんの顔も違います。



そり肩を寄せ合っていたり、右翼席に入れなかったトラキチ・グループが、結果としては「ゲリラ」みたいに、紛れ込んでいたりしていた。おもしろかったのは、パパに連れられた幼ない坊やが二人居て、一方は巨人、他方は阪神の帽子をそれぞれ被り、仲良く肩を並べて呉越同舟、熱心に声援を送っていたことである。こういう場合パパの立場は、いささか微妙ではあるまいか？などと、余計なことを考えてみると、これまた、オモシロイ。

試合は、「10－2」と、タイガースの圧勝に終った。当然『阪神タイガースの歌』（佐藤惣之助作詞古関裕而作曲）を斉唱するファンは、生き生きとして、陶然たる表情である。トイレで長い列をつくりながら「今年はイケるで。優勝や！」とか、「ハッハッハ、春の椿事やな。あとがコワいなァ」とか、話し合っている。試合が終ってざっと一五分ばかり。さらにそのあとは、球場の外のあちこちで「バンザイ」を三唱したりして、また約一五分。近くのおでん屋からも、陽気な声が聞こえる。興奮醒めやらぬ面持ちで、「勝利の美酒」に酔うのである。

私に言わせれば、タイガース人気は、「強い巨人」あってのことで、老舗の阪神球団は、パ・リーグ・ファンから見ると、しょせんは、一種の「権力」なのだが、それにしても、こういうお祭り騒ぎを肌で感じてみると、なぜ、タイガースなのか……という問題に、いささかの興味を、抱かざるを得ない。このテーマに挑んだ「社会学者」は、だれ一人として、居ない。タイガースは、偉大である、ウン。

■第9回神戸女流文学賞受賞作

連載小説《第3回》

いちばく

宇山　翠

題字・絵／大島　幸子

「やもりの卵でございますよ」
「やもり…？　これが……」
恭子は息をのんだ。
大工が覗き込む。
「そうよ、やもりよ。古い家を壊すと、こんな奴が、よう、見つかる」
大工は言葉を続ける。
「この家にゃ、やもりが出るはずじゃ」
「――」
「気色わるうないな…？」
恭子は口を閉じたまま、白い卵を見つめている。
「一部屋、一部屋、修繕せんで、こんな古い家はブチ壊して、新築したほうがエエのにのう」
大工の声はさすがに低くなり、呟きめいたものに変わる。
恭子は白い卵に視線を集めていた。やもりの小さな腹にさえ、卵を宿す力があるという分かりきったことが胸に応えた。
（この私にだって、いまなら、いまのうちなら、まだ妊娠する能力はあるのに…）
焦燥が熱い塊となって、みぞおちを灼く。
恭子は三十九歳になる。男との思い出の日々がなかった訳ではない。正式に相手を紹介されたことも幾度かある。が、結婚への踏切りがつかなかった。
朋子をどうするか。
朋子はこの家に残ると言い張る。
「部屋を人に貸すから、心配しないで…」
笑いを見せて言うこともあるが、それで生活ができるとは思えない。
朋子名義の空き地を売れば、当分は食べていけるだろう。が、そのあとはどうするか。先々の生活設計が立たなければ、恭子は気がすまない性分である。波風を立てないためには、現状維持しかない。
母の存命中もそうだった。いざとなると、母はこの家に同居してくれる男を望んだ。そういうお誂らえ向きの男は、なかなか現れない。あせって、くだらない男を家に引き入れたと思われたくもない。
歳月の中で、母や朋子を疎ましく思ったこともある。肩を寄せ合ったり、角突き合わせたり、傷口をなめ合ったりで、三人それぞれに感情の起伏はあった。
恭子の体の線は、まだあまり崩れてはいない。が、勤務先の化粧室などで、若い女子社員と一緒になったりすると、鏡の中に映る顔に、皮膚の張りの決定的な差を見せつけられる。
忘れられない相手がいた。彼と結婚できるのなら、朋子もこの家に残したかもしれない。
西京大学の講師である。妻は長く病床にあり、女の子が一人いる。妻の死は時間の問題だと聞いた。
そういう情報を頼りに、彼と会う時間だけを繋ぎ合わせ、恭子は生きた。
その時間は短くとも、濃密な、輝やかしいものに思えた。
腕の中にしっかりと搦めとり、燃えた。激しく短い一瞬が奔り去る。
妻の葬儀の日には、心から掌を合わせるつもりだった。が、妻は死ななかった。
彼と別れて五年が経つ。
一度だけ、恭子は産婦人科医院の門を潜ったことがある。
不時の出血を見たのだ。
（がんでは…？）
恐怖が胸をかすめた。
医院の待合室には、一種、独得な湿っぽさがあった。妊婦ばかりが三人いた。大きな腹部をかかえた女たちである。中絶するつもりはないのだろう。三人とも年若い。突き出た腹に手を当て、満ち足りた顔をしている。きっと、生温かい確かな生きものの胎動に溺れているに違いない。

恭子は自分の不運、惨めさを思い知らされる感じで、顔を伏せた。

名前を呼ばれた。

妊婦たちから顔を背けるようにして恭子は診察室に入った。

高い診察台に上がるよう、看護婦のやわらかい声に促された。こういう台に上がるのは初めてのことである。内診台と言うらしい。わいせつな姿勢を強要する台である。

「足を伸ばしてください」

看護婦の声が不意に乾いたものに変わった。

「力を抜いて……楽な気分で……」

声が事務的に続く。

（楽な気分になど、どうしてなれよう）

唇を噛みしめた。

看護婦は恭子の足首を摑んで左右に大きく開き、固定させた。

目の前に幅の狭い白いカーテンが降り、上半身と下半身を分断した。

「大きいなあ」

カーテンの向こうで医師の声がすを。

（一体、なにが、どこが、大きいと言うのか）

内診台の上で、恭子は屈辱に顔をゆがめた。

診察は終わった。

肢台から右足首を外そうとするが、硬直して思うとおりならない。看護婦の介添えで、不様な格好を曝しながら左右の足首を外した。一刻も早く、この場から姿を消してしまいたかった。

診察の結果は、子宮頸部に大きなポリープができているということだった。普通なら、こんなに大きくなる前に、交接による出血があるらしい。問診で、未婚と記入されたカルテが、どうやら医師を納得させた形である。

恭子の知識では、ポリープは、刺激される頻度の高い部位にできるはずだった。声帯ポリープのため、声が出なくなった歌手のことが、すぐ頭に浮かぶ。

彼と別れて以来、使用されていない、いや刺激される機会のない部分だということに、二重の恥と無念を覚えた。別れた相手にその思いを転嫁している。長患いの彼の妻は小康を得ており、彼自身は助教授になったと聞く。

恭子の子宮頸管ポリープは細胞検査の結果、良性ということで灼き切られた。

膿盤の中で血の溜まりを広げた肉状のポリープが、恭子の足の甲に落ちてきた。

（あっ……）

声をあげた。

「すみません、奥様…」

矢川サキが申し訳なさそうに頭を下げている。手には棒切れを持っていた。

やもりの卵は一度、恭子の足の甲に当たり、それから地面に落ちた。

サキは棒切れの先で卵を潰し、さらに踏みつける。砕けた卵から黒い糸状のものが出てくる。糸は動いた。

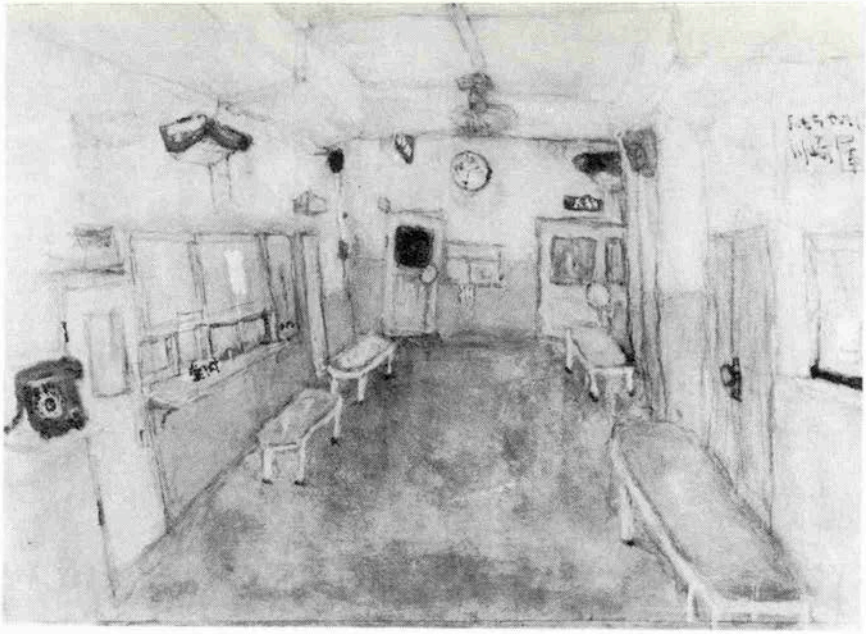
「放っておきますとね、これが一匹ずつ、やもりになるんでございますよ」

言葉とともに二度、三度と力をこめて踏み潰す。黒い糸が動かなくなると、まだ壁土に残っている卵を棒切れで丹念に掻き落とした。夏の陽を吸いつつ落下する白い球は声なき声を放ち、サキのサンダルの下に命の滴りを残した。

やもりが出るようになって幾年が経つだろう。最初の間は確かに気味がわるかった。

夜、なにげなくガラス戸に目を向けると、きまって、白い腹を見せ、四肢を広げた姿が張りついている。視線をあわてて反らす。しばらくして、おそるおそる目を遣ると、まだ張りついている。無気味さが先に立ち、追い払うどころではない。

垂直のガラス戸に張りついていて、よく、落ちないも



のだといまいましく思い、時折、内側から指ではじくようになったのは、さらに何年か経ってからである。

腐蝕したこの家屋には部分的な修理を施すより、思いきって壊し、土台からそっくり建て替えるほうが良いに決まっている。

新築するなら、その間の住居として寮を提供するとまで建築会社は申し出た。

だが朋子は、一時(いっとき)でも、よそに移ることを好まなかった。新しい場所で、人々の視線を浴びるのは、衣服を剝(は)ぎ取られるほどにも、つらいのだ。彼女の行動範囲は限られている。

一部屋、一部屋、必要な個所だけを修繕すれば割高にはなるが、新築するよりは費用を抑えることができる、との胸算用が恭子自身にも働いた。

工事の進行につれ、朋子は不機嫌になっていった。サキの鮮やかな家事能力の発揮で、朋子の出番が失われていることに恭子はようやく気づいた。

サキは朝早くからやってくる。それは有り難かった。その日の作業について指示を与えるのに好都合だからだ。

恭子の出勤をサキは門口に出て見送る。きりりとした目を向け、深々と頭を下げる。

「行ってらっしゃいませ」

見送りは、これまで朋子の役目であった。

朋子の、門口での言葉は決まっている。

「ねえさん、背筋をしゃんと伸ばして歩いてよ。そうしないと、老けて見えるから」

背筋のことを口にする朋子自身の背は曲がっている。足も引きずって歩く。幼時に患った小児まひの後遺症によるものだ。

サキは夕方、規定の時刻が過ぎても帰ろうとはしない。仕事を見つけ出しては働いた。職人が引き揚げた後は空き地に入っている。勤務を終えて帰宅する恭子を、空き地の中から迎える目になりがちだ。

「土いじりをしていると、ときの経つのも忘れてしまうんでございますよ」

そういうところは、母に似ている。

当初、朋子は日当の割増し請求を気にしたものだ。恭子とて、思いは同じである。

サキは、三千円しか受け取ろうとはしなかった。

「私が、好きで働かせていただいているのでございます

から……じっとしているのが、嫌な性分で……」
「――」
「夏の陽は長くて、よろしうございますねえ」
事実、立ち働くのが楽しそうに見えはしたが、老いてなお他人の家で働かなければならない境遇への弁解だと思ったりもする。
サキが帰ったあとで、朋子は不快げに言う。
「今日、新しくきた若い大工さんたら……あの女のことを、この家の者みたいに思い込んで……ご隠居さんて、呼んだのよ」
職人たちは恭子が出勤したあとにやってくることが多い。誤解が生じるのも無理からぬことだと思う。それほど、サキの立ち居ふる舞いは、この家になじんでいた。
その夜、浴室から出た恭子は肌に化粧水をたたきつけがなら朋子に言った。
「台所の流しね、あんたが使い易い型に決めるからね。吊棚もよ」
「新しいのに取り替えるの…？」
出費がかさむと不満げな口調だ。
「そう、みんな新しく……主婦のあんたが働き易いようにしなきゃね」
「――」
「少し余分に費用がかかっても……私たち、一生、住む家だもの。台所は便利にしておきたいのよ、この際…」
顔は三面鏡に向けたまま、声だけを明るく響かせる。
朋子の沈黙は長かった。
恭子は振り向く。
複雑な色が朋子の目に揺らいでいる。
食卓に手をつき、朋子は立ちあがった。
「ねえさんの布団、敷いておこうね」
「敷いてくれる…？　助かるわ。今日は私、疲れてるの」
恭子に疲労感はない。
肩を上下させながら朋子は六畳の部屋に入っていく。
その姿を見送ったあとに、気持ちの落ち込みを感じた。
（一生、この家に住むだなんて…なぜ口にしたのか）
恭子は鏡台の前に座わり続けた。

恭子一家の私事は、サキの目や耳にいや応なく入っていく。同様にサキの側の事情も分かってくる。
六年前までは、確かにサキは《ご隠居さん》だった。息子夫婦、孫たちと一緒に、庭つきの家に暮らしていた。その住居を息子は売り払っている。通勤の便と、子供を名門校に入れるためにという理由で、マンションに移り住んだのだ。
「奥様、マンションって、狭うございますよ」
サキの部屋はなかったのだろうか。
「アパートの独り住まいのほうが、気楽でございます」
体よく、はじき出されたらしい。
「細かいところに気がつきすぎるから、嫁さんに嫌われたのよ、きっと」
朋子の言葉は当たっているだろう。
好きで働いていると言う矢川サキが、ある日曜日、恭子に話したことがある。
「奥様、お宅のように気持ちよく働けるところって、そう沢山はございませんですよ」
お世辞だろうと受け流した。
だが、聞いているうちに、この六年間、他人の家庭を転々としてきたサキの胸には、あふれる思いがあるようだった。
サキが離れた土地の病院で付添婦をしたのは、エリート社員である息子の世間体を思いやってのことだろう。
彼女の働きぶりを退院患者から伝え聞いた旧家の夫人に乞われ、その家に住み込むことになった。夫人の親族からは、元宮家の妃殿下を出しているという。サキが晴れがましい気持ちを抱いて、その家の三畳の間で寝起きすることになったのも無理はない。
（つづく）